



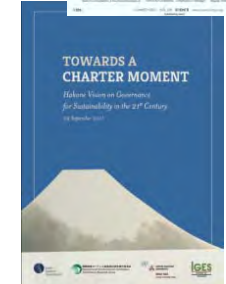
政治学・地球システムガバナンスと 持続可能な開発目標、 そしてFuture Earth

東京工業大学大学院社会理工学研究科
准教授蟹江憲史

政治状況の変化 ⇒ ガバナンス変革の 必要性 - Towards a charter moment -



- Earth System Governance project (2009-, IHDP)による研究成果 (*Science*, 2012.3.16)
- リオ+20の制度枠組論議に提言
 - 現在の国連制度・国際制度は1945年がベース
 - ⇒ 21世紀の課題対応には制度改革が必要



- 1945年...安全保障・平和が主課題(憲章chapter7、安保理)
- 2012年...持続可能性・次なる"charter moment"へ
- 2015年以降の「開発」目標論議(ポスト・ミレニアム開発目標)における持続可能な開発目標(SDGs)を梃に

OUR

1972年 国連人間環境会議（ストックホルム会議）

リオ+20の結果策定することとなった、
ミレニアム開発目標（MDGs）後（＝2015年以降）の
『開発』目標に統合される国際目標

- ・ 簡潔であること
- ・ わかりやすいこと
- ・ 普遍的なもの（途上国だけが対象ではない）
- ・ 2015年までに策定



2012年 国連持続可能な開発会議（UNCSD, Rio+20）

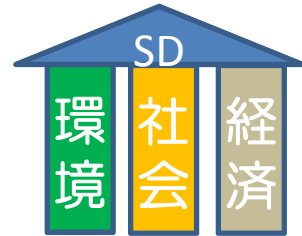
2015年以降の「開発」アジェンダ／持続可能な開発目標（SDGs）

Future Earth関連研究者による 共同研究

- FE関連研究者による共同研究
 - Owen Gaffney, Gisbert Glaser, David Griggs, Norichika Kanie, Ian Noble, Marcus C Ohman, Johan Rockstrom, Priya Shyamsundar, Mark Stafford-Smith, Will Steffen
 - トランス・ディシプリン（文理実融合／超学際）の実践としてSDGsの設定（～2015年）・実施・評価（2015年～2030年）は恰好の事例
- 初期成果で2つのことを提示
 1. 目指すべき「持続可能な開発」とは？
 2. SDGs策定の方法論



1. SDGで実現すべき「持続可能な開発」とは何か？



人類世へ



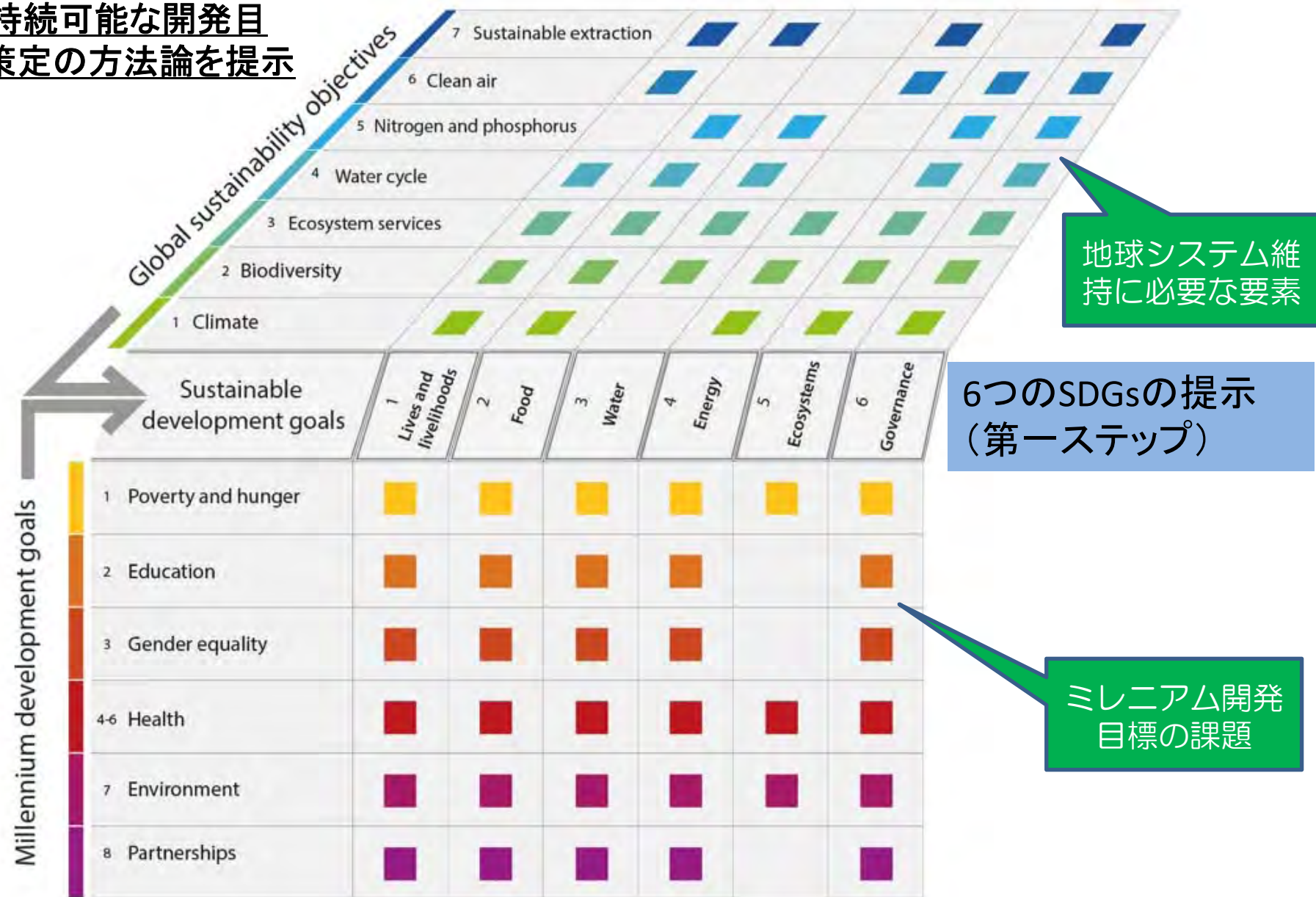
地球と人間の変化
⇒ 人類世における「持続可能な開発」の再定義

Development that meets the needs of the present **while safeguarding Earth's life-support system**, on which the welfare of current and future generations depends

現在及び将来の世代の人類の繁栄が依存している **地球の生命維持システムを保護しつつ**、現在の世代の欲求を満足させるような開発

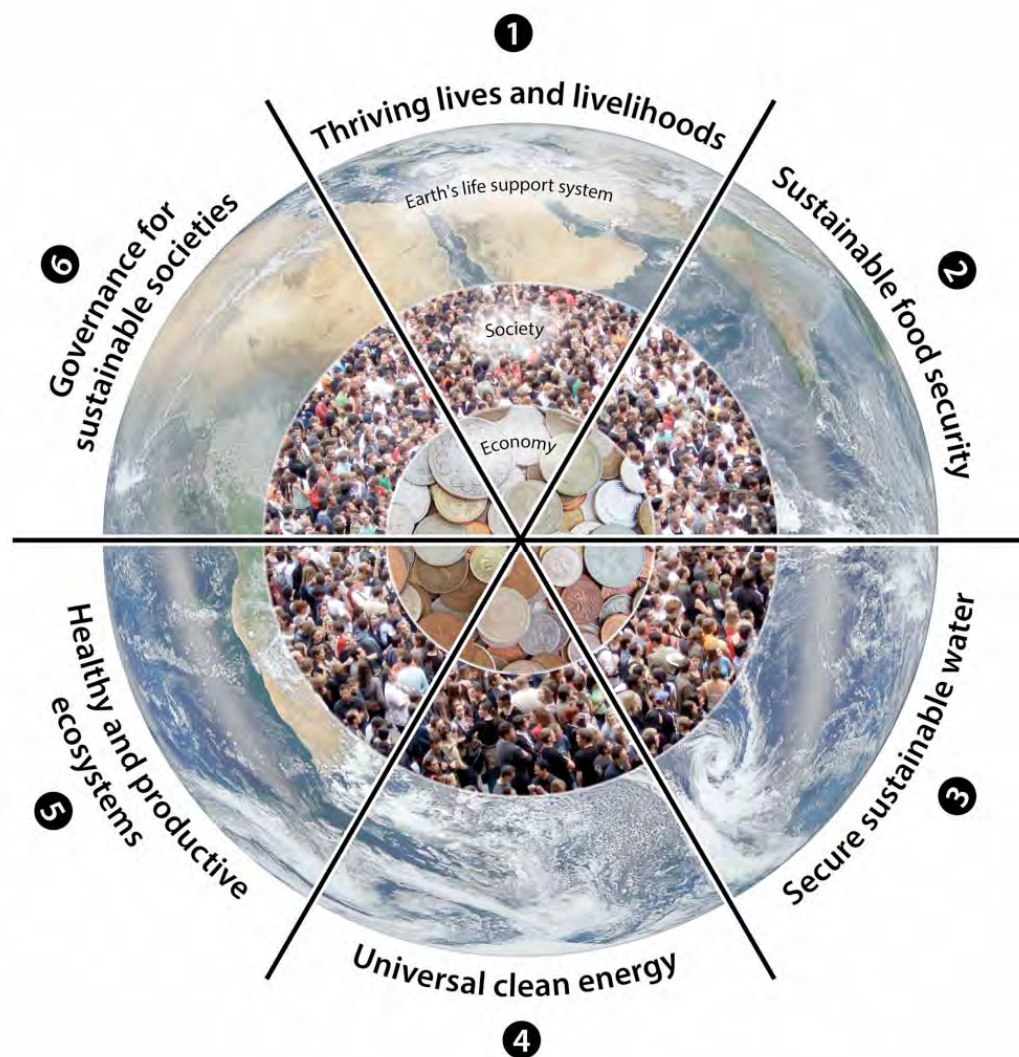
David Griggs, Mark Stafford-Smith, Owen Gaffney, Johan Rockstrom, Marcus C Ohman, Priay Shyamsundar, Will Steffen, Gisbert Glaser, Norichika Kanie and Ian Noble, 'Sustainable Development Goals for People and Planet.' *Nature* (Vol 495, 21 March 2013).

2. 持続可能な開発目標策定の方法論を提示



David Griggs, Mark Stafford-Smith, Owen Gaffney, Johan Rockstrom, Marcus C Ohman, Priay Shyamsundar, Will Steffen, Gisbert Glaser, Norichika Kanie and Ian Noble, 'Sustainable Development Goals for People and Planet.' *Nature* (Vol 495, 21 March 2013).

2030年の6つのSDGsの例



インターディ
シプリン（文
理融合）的な
研究成果

David Griggs, Mark Stafford-Smith, Owen Gaffney, Johan Rockstrom, Marcus C Ohman, Priay Shyamsundar, Will Steffen, Gisbert Glaser, Norichika Kanie and Ian Noble, 'Sustainable Development Goals for People and Planet.' *Nature* (Vol 495, 21 March 2013).

FEの課題：インター・ディシプリンからトランス・ディシプリンへ

	目標	主な内容
1	生命及び生活の繁栄	貧困の根絶、教育、雇用と情報へのアクセス改善による豊かさ増大、健康状態や居住状況の改善、持続可能な生産消費活動の実現を目指しながら不平等を改善する。これらの多くは既存MDGsの延長及びその先進国への適用による。
2	持続可能な食糧安全保障	MDGsの飢餓目標の拡充による飢餓根絶、持続可能な生産、配分、消費システムを通じ、栄養源の確保を含む長期的な食料確保を達成。窒素及びリンに関する数値目標の設定。
3	持続可能な水安全保障	きれいな水と基本的衛生状態の完全普及、統合的水管理による効率的配分の達成。これによりMDGsの健康目標に貢献するとともに、排水や流域での水利用上限の設定。
4	クリーンエネルギーの普及	クリーンエネルギーを普遍的かつ安価で利用できるようにすることで、環境汚染や健康被害を最小限に抑えると同時に気候変動を緩和。これにより、MDGsの教育、ジェンダー平等、健康目標等に貢献。
5	健全かつ生産的な生態系	適正な管理、評価、測定、保全、修復により生物多様性と生態系を維持。愛知目標とMDGsの環境目標を統合。
6	持続可能な社会のためのガバナンス	上記5つのSDGsを実現するため、社会のあらゆるレベルにおいてガバナンスと制度を変革する。

各目標へのガバナンスの融合・開発分野からの知見統合の強化・国連プロセスやステークホルダーとの連携・協働

「次の10年」がガバナンス変革のカギ
⇒ 危機を乗り越えるための方法論として文理融合
から文理社会融合・協働へ(trans-disciplinary)



Future Earth



持続可能な開発目標（2015設定、目標年2030頃）



sustainable な trans-disciplinary研究（含実装）

2020年以降の気候変動枠組・SDGsの評価・実施など政策課題毎の
プロジェクト

Future Earthの(世界／アジア／日本での) 推進へ向けて

- 日本が拠点となるためには、①研究推進 と ②事務局機能の2本柱が必要
- 研究に関しては、
 - Trans-disciplinaryの理念のもと研究を実践・推進し、発信する【政策実務、ステークホルダーとの協働】
 - 世界的研究ネットワークに入り込み、リードする【超国家】
 - そのためにアジアの特性と独自性を有効活用することが重要。
- 研究実施はボトムアップ・分散的であっても、(欧米主導からの転換・アジアでの主導権を握るには)核・ベースとなる中核(機関)の存在が理想

FE...真の意味での(ステークホルダー・学問領域・国境の)
バウンダリーを超える仕組み作りのために